

責任編集 松田道雄「貝原益軒」中公バックス、日本の名著 14、中央公論社 1973年11月10日刊  
を読む

## 楽訓

### —清福の楽しみ—

#### 1. 清福の楽しみ

- (1) 清福ということがある。楽しみを好む人はかならずこれを知っていないといけない。
- (2) これは識者の楽しむところで、俗人は知らない。
- (3) だからわが身に清福を得て大きい幸福があるのに、これを知って楽しんでいる人はまれである。
- (4) たとえば宝の山に入っても、宝が何であるかを知らないと手ぶらで帰るようなものだ。
- (5) 清福は富貴が驕慢に楽しむ<sup>さいわい</sup>福ではない。
- (6) 貧賤で世にみとめられなくても、その身が気楽で、静かで、心に憂いがなければ、これを清福という。
- (7) 余韻があってしづかに書を読み古の道を楽しむのは、清福の大きな楽しみである。
- (8) またその心が風雅で、古書を読み、詩を吟じ、月花を愛し、山水を好み、四季のうつりかわるおりおりの美景と、草木のかわるがわるさかえて美しいのを見て楽しみ、貧しいが飢えと寒さの心配がなく、粗食でも口になれてしまえば、その味があり、しつこい美味をうらやまず、淡泊なのはかえって養生によろしい。
- (9) 布の着物、紙の寝具でも、多少寒を防げれば、それでよろしい。葎<sup>むぐら</sup>の生い繁った<sup>お</sup>荒屋に起きふししても、雨風の憂いはなかろう。
- (10) もし幸いに、書を多くたくわえて書架にならべていれば、貧とはいえぬ。
- (11) これは真の宝であるから、つづら一ばいの金にまさっている。
- (12) また良友があって道を論じ、いっしょに月花を賞して楽しみ、風光の地にあそんで、奇景を愛する。
- (13) これはみな清福を得たのである。
- (14) 何の縁あってか、こういう福をうけるのは、富貴の驕楽にまさって大いなる幸福である。

#### 2. 読書と良友

- (1) 清福は余暇があって、身は気楽で、貧賤でも心配のないのをいう。書を読んで古の道に不確かなところがない。
- (2) また山水月花の楽しみがある。
- (3) これは財産利益の富饒<sup>ふじょう</sup>な福にまさっている。
- (4) 静かな室に安坐して、書を読み、道を楽しんだり、良友と対坐して道を論じたり、ともに風月を賞したりするのは清福のすぐれた楽しみである。

#### 3. 天二物をあたえず

- (1) およそ生きているもので、静かで余暇があるというのはまれである。
- (2) 富貴の人は昔からどの時代にも多いが、心が気楽で憂苦がなく、身に余暇があつてつねに楽

しむ人はめったにいない。

- (3)それだから、清福の楽しみは富貴よりもはるかにまさっていることを知るべきである。
- (4)愚かな人は清福を得ても知らないで楽しまない。
- (5)また清福を知っていても、身に清福がなかったらこの楽しみがない。
- (6)この清福を得る人が世に少ないのは、天が惜しみ給うところであるから、もっとも得がたいという。
- (7)もしこの清福の楽しみを知って、清福を得たら世にめったにない幸福である。
- (8)天の物をつくるのに、二つとも完全であることはない。
- (9)花のよいのは実がよくないようなものである。
- (10)すでに清福を得た人は、さらに富貴を願ってはならぬ。二つとも得ようとするのは欲が深く天命にそむいている。
- (11)清福を得てもなおほかのことを願って、富貴をうらやんで、みずから足ることを知らぬのは、分を知らないで楽しみを忘れるのである。愚かなことだ。

#### 4. 旅行の楽しみ

- (1)旅行して他郷にあそび、名勝の地や、山水に美しい佳境にのぞむと、良心を感じおこして、けちくさい心を洗いすすぐ助けになる。
- (2)これもわが徳すすめ、知をひろめる手段であろう。
- (3)また言うに言われぬ異境に行き、見なれぬ山川のありさまを見て目をたのしませ、その里人であってその風土をたずね、あるいは奥まった山のふところに、岩をふんでたずね入ると、もともと山水を好み、青山をしばしば夢に見るような人は、心をうばわれて帰るのを忘れる。
- (4)あるいは海辺や山が遠くにみえる限界のひろい眺めは、万戸の領地をもつ王侯の富にもまさっている。
- (5)またその里にできた珍しい名産を見て、その味をこころみるのもめずらしく、心をなぐさめるものである。すべて景勝の地にあそんで見聞きしたことは、その時だけ耳目を喜ばせるのではない。何年もたってその見聞きしたありさまが、老後までおりおり思い出されて、あたかもその時見聞きしたと同じ思いになって楽しめる。これだから世に結構なことを思い出というのももっともなことである。

#### 5. 忍の理

- (1)忍はしのぶともこらえるとも読む。
- (2)俗にいう堪忍かんにんすることである。
- (3)忍ぶべきことは多い。
- (4)といっても、およそ怒りと欲との二つを出ない。
- (5)わが身の好む酒食・音曲おんぎょく・女色・財利などの私欲をこらえて、ほしいままにしないのと、身の粗末で豊かでないのをこらえて、貧にあまんじ、苦しめないのは欲を忍ぶのである。
- (6)人がわれに無情で無礼なのを、凡人はこんなものだと思いこらえて、怒りうらまぬのは、怒りを忍ぶのである。
- (7)およそ怒りと欲を忍べば、心は平らかで、気は和らぎ、身は気楽で、人の妨げにならず、恥がなく、苦しみがなく、のちの憂いがなく、禍がない。
- (8)忍の一字から万の善が出てくる。ゆえに古い言葉に「忍は是れ衆妙(天地万物の微妙な道理)の門」というのである。

(9) 忍の理は楽しみを得るのに、大いに役立つ。

## 6. 酒は天の美禄

- (1) 酒は天の美禄である。少しく飲めば心が大きくなり、憂いを消し、興をおこし、元気を補い、血気をめぐらし、人と飲<sup>め</sup>びを合わせ、楽しみを助けて、その益は多い。
- (2) もし多く飲んで酩酊<sup>めいてい</sup>すれば、人の見る目も見ぐるしく、口数が多くむやみに語り、姿も常とかわって慎みを失い、心もあれて狂人のようになる。
- (3) 古人がこれを狂薬といったのももっともである。そのうえ病気になってなおりにくく、大きな禍になる。
- (4) 若い時から大酒を戒めないで習慣になってしまうのも残念である。それだから古い言葉に「酒は微酔に飲み、花は半開に見る」というのである。
- (5) 酒を飲むならほろ酔いを限度とし、楽しみを失わないようにする。
- (6) 飲みたいだけ飲んで苦しみを求めてはならぬ。天の美禄として、楽しみを生ずる結構なものを、かえって狂薬とし、大禍をなして憂いを生ずるのは、いやしむべきことである。

## 7. 気を養う

- (1) 昔の俗曲・民謡の類で、節がおもしろいのを、元気に一句々々うたって満足するのも、心のめいるのを開いて気を養う助けとなろう。
- (2) 古人は、歌を歌い舞を舞って、その血気を養った。これは心を楽しませ、気を養う術であろう。

## 8. 勇者と和順

- (1) 武士は勇を専一にしなければならぬ。
- (2) 勇を外にあらわさず内にふくむのである。
- (3) 常の時は和楽にして、人に対するに温厚でなければならぬ。
- (4) 「勇天下におおえども、これを守るに怯<sup>きよう</sup>を以てす」と「孔子家語<sup>こうしけご</sup>」にいりようにするがよい。
- (5) 怯とは臆病のことである。
- (6) また「大勇は怯<sup>つたな</sup>きが如し」ともいう。これは外に勇をあらわさないことである。
- (7) 和順で礼があると人はあなどらない。
- (8) 人にあなどられまいと言語・氣象をあらあらしくしてはならぬ。これは和楽を失ったのである。
- (9) 真の勇者は顔かたちがあらあらしくない。
- (10) かえって柔和である。
- (11) 張良<sup>ちやうりやう</sup> (前漢創業の功臣) は、その形が婦人のようで、その氣象が従容として静かであったのは真の大勇である。
- (12) 欲をよくこらえ、義を見てはかならず行ない、節義をかたく守る。
- (13) これが真の勇である。真の勇者はつねに和楽である。

## <コメント>

貝原益軒 80 歳の作品。人生の楽しみとは何か、その人生の楽しみを得るためにはどうしたらよいかを、80 年間の人生経験に基づいてわかりやすく述べた、大人のための道徳の教科書。300 年たった今でもほぼその通りあてはまる「人生の教科書」。